かりそめの恋の人　有島武郎

かりそめの妻の座
一九六五年二月十日発行
著者丹羽文雄
発行者野間省一
印刷所信毎書籍印刷株式会社
製本所黒柳製本株式会社
発行所株式会社講談社
東京都文京区音羽町
電話東京九四二局一一一一大代表
定価三五〇円
©1965 Fumio Niwa
落丁本・乱丁本はおとりかえします

かりそめの妻の座

丹羽文雄

講談社版

目次

かりそめの妻の座……五
制服と暴力……一三
夏草……一六七
山の女……一八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

裝幀

荻

太

郎

かりそめの妻の座

一

朝のひととき、つねの家の茶の間からにぎやかな笑い声がきこえた。十一月のなかば、火の恋しいころである。大きな瀬戸火鉢をかこんで話によねんのないのは、いつもの顔ぶれで、隣家のタイヤ修理の須田であり、裏の長屋にすむトラック運転手の妻の珠江、それに下駄屋のおかみの照子であった。つねのいれるお茶をすすりながら、話は熱した。いちばん年齢の若い珠江が、さかなにされた。珠江のほかは、いずれも四十をすぎているので、話し方も露骨である。珠江は三十をすぎたばかりであり、子供がなく、さかなにされることが面白く、たのしくてたまらないふうであった。話は、卑猥なことにかぎられた。それ以外は適当な話題がないようであったが、女三人の中に男がひとり加わっているのが、いっそう卑猥な話に現実感をもたらせた。女たちにしても、話し甲斐があるというものである。須田は色が黒くて、せっかちなしゃべり方をする。落着きのない性格も、この種の話題にはうってつけの登場人物であった。須田は、質問をあびせかけられる。あいまいな回答はゆるされなかった。微に入り、細をうがった質問には、その調子で応答をしなければならない。もしも須田が考えこむ人間であり、繊細な情感の持主であれば、口を緘してしまうだろう。そして、無言の内に女たちの不品行を指

摘し、その無知さかげんを糾弾することになる。そんな人間は茶の間には歓迎されなかった。まったく須田は女たちにとって、気のおけない男であった。年齢も若くないことが、安心であった。

「ひとの噂をしているよりも、こんな話ならだれも傷つくことはないのだよ。それに、みんなよろこんでいるからね」

と、つねがいう。

「ここで話をするようなことを、私はうちのひととしたこともないのよ」

珠江がふとそのことに気がついて、不思議そうな顔をする。トラック運転手の主人とふたりきりのときの珠江は、別人のようであった。人間がすっかり変ったというのではない。この茶の間のような無責任さで、おのれの趣味をさらけ出すということがないだけであった。ここでは、手ばなしにげらげらと笑った。が、うちにかえれば自ずと世帯くさい顔になってしまう。トラック運転手は一日車を走らせているが、うちにかえれば妻をかまうのが億劫という弱い男ではなかった。主人の清水は三十六歳で、無口だった。夫婦のいとなみは健康であった。つねの家の茶の間のようにげらげらと笑ってしまうようなことがらではなかった。そのときの自分を思うと、そのことが茶の間にもち出されると、げらげらと笑わずにはいられないものにすり変えられるからくりが、珠江にはうまくのみこめないようであった。主人にはいわれないようなことを、珠江は茶の間で話すのだ。珠江の話し方は具体的であり、生ま生ましかった。が、経験のゆたかな年上の女や、須田にかかれば、子供あつかいをされた。それにしても、よそゆきの話をしているよりも、こうした話題の方がたがいに親密感をおぼえるというのは、何故だろ

うか。だれもがかくしたがっていることを、卒直に口にすることが、ざっくばらんに心と心がむすびつくことになるからだろうか。たしかにつねの家の茶の間には、常軌を逸したものがあった。しかも、朝からである。げらげらと笑いながら、友だちは朝のいっときをたのしんだ。珠江は、つねに対しても、照子に対しても、気をゆるしてかまわなかった。須田に対しても、同様だ。たがいに組しやすしと思っているようであった。みんなは自分の手の内をみせてしまったのだから、いまさら改まった顔もできないのだった。面白いことには、茶の間にあつまる常連は、自分らの話題の範囲があまりひろくもないということに気がついていなかった。それを指摘されたならば、

「須田さんが悪いんだよ。話といえば、すぐそっちへもっていくんだもの。ついこちらもつられて、そんな話ばかりするようになったんだよ」

「まったく須田さんときたら、まじめな話をしたことがないサね」

「いけすかないひとだよ」

「ほんとうに……」

しかし、三人の女は、須田の仕向ける卑猥な話から顔をそむけることがなかった。

「須田さんて、以前大阪で、やっぱりタイヤの修理をやってたんだってね」

「うちのとなりを借りたのが、去年の春だったよ」

と、つねが答えた。隣家は小さい空店だった。小さすぎたので、家族と住むことができず、町外れからかよっている。若い従業員と二人で、タイヤの修理をやった。

「くいつめて、生れ故郷にかえってきたというところだね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「私はまだいっぺんも、須田さんのおかみさんに会ったことがないよ」
つねが思い出したようにいった。そのことが、にわかに不思議に思われた。
「そういえば、私も知らないよ。だれも知らないじゃないかね」
下駄屋の照子は、町内で顔だった。広報車というあだながついている。照子が知らない以上、つねや珠江が知らないのは当然であった。
「いつもいやらしい話ばかりする須田さんのおかみさんの顔を、いっぺんみてやりたいわね」
そのことは三人の女にもいわれることだったが、三人は須田の犠牲者のつもりだった。
「金がない、金がないって、しょっ中いってるわね。あれが口癖ね」
と、つねがつけ加える。
「大阪仕込みだけあって、がめつい男だわ」
須田は毎朝店にくると、きまってつねの家に上りこむのである。一服していると、裏の長屋から珠江が主人を送り出し、つねの家にやってくる。自分のとこの茶の間のように上りこむ。そして、一日の大半をつねの家ですごした。つねの家には、こうした人間を吸いよせる何かがあるかのようであった。つねはひとりぐらしである。二階に三人の下宿人をおいていた。つねの気さくな性質が、近所の人間をあつめるのだ。まったくこの家にいると、気がおけなかった。珠江は自分の家よりも、つねの家になじみがふかかった。生活というしんきくさいものは、裏の長屋においてきて、つねの家では無責任に時間をすごせばよいと思っているらしかった。がいずれも生活だったのだ。生活というものは、しばしば、くだらない反覆や、些細なこと、げらげら笑ってしまえばあとに何ものこらないようなことから出来ていた。

「珠江さんは、ほんとうにいいからだをしてるわね」
照子が思いがけない発見のようにいった。
「それで子供ができないなんて、不思議だよ」
つねが首を傾ける。
「若さって、いいものだね」
「照さんにも、かつてはいい時があったじゃないか」と、須田が口をはさんだ。
照子は垢じみたきものの上から両の乳房を持ちあげるようにして、
「二人の子供を育てたんだからね」
「珠江さんのは、お椀を伏せたみたいだよ」
そういうつねに向って、珠江が目をかがやかすようにしていった。
「いつかいっしょに風呂にはいったんだけど、つねさんの肌がきれいなのに、びっくりしたわ。ぴんと張りきってるわ。それに、つやがいいわ」
肌が白いとはいわなかった。
「そりゃ三十二年も、生れたままだったからだよ。あらされる暇がなかったおかげだよ」
須田は、つねが小千谷家でながらく女中奉公をしていて、三十二歳で結婚したのをきいていた。
「珠江さんがほめるほど、私は自分のからだをすばらしいと思ったことはないよ。いっこう見ばえのしないはだかだと思っているだけさ」
つねは、五尺三寸あった。その肌に張りがあり、つやがあり、みごとだと茶の間で決定され

ることが、本人には気の毒なようであった。つねは、四十三になった。つねの顔は、ある一点をのぞけば、ごくありきたりの顔だった。その表情に、きりっとしたものがなかった。目が細く、額が男のようにひろかった。髪が多いという方ではなかった。ずるそうな感じは、その顔のどこにも見当らなかった。口と鼻と目を別個に観察されることは、迷惑であった。つまり、それほど特色がないということになる。が、その顔には年齢にふさわしくない生気があった。四十三年のあいだに失われてよいはずのものが、失うきっかけがみつからず、四十三の今日まで持ちつづけてきたようであった。がひとつだけ大きな特色があった。それは口である。大きいというのではないが、日本人の女の中にしばしば見かけるとんがった口もとである。上下の歯茎と歯がつき出しているのだ。大きな、きれいな前歯であった。上下の歯ならびが外側につき出していて、ごまかしようのないものだった。横からみると、からす天狗のくちばしを思わせた。上下の唇がそれをかくすと、窮屈な感じであった。つねは緊張すると、上と下の唇で出っ歯をかくそうとした。すると、相手はつねが精神の中で大きな無理をしているように感じた。が、出っ歯をむき出しにされると、相手はまた不安を感じるのだった。いつも唇のうしろにかくされているものがあまりにむき出しに、近くに迫られると、不安をおぼえるものである。調子はずれな出っ歯の口許が、つねの運命をきめた。それは、四十三年もつづいた苦悩であった。

「珠江さん、一度も出来た気配もなかったのかね」

照子には、珠江がうまずめであることが承服できないのだった。折があると、そのことにふれた。

「そんなこと、一度もないわ」

須田が、断定を下した。
「畠はいいけど、種が悪いのさ」
「須田さんたら、げすな表現しかできないのね」
「そういってもらいたい顔をしてるくせに……」
照子がおしゃべりにくるのは、つねの家だけにかぎらなかった。家では息子たちが大きくなっているので、自分は暇であり、毎日あちらこちらとしゃべり歩いた。つねの家には、一日に一度は必ず顔をみせた。町内のどんな噂も、照子の耳はとらえた。いったんとらえた噂は、自分だけのものにしておくことができなかった。話術もなかなか達者である。
気さくなだけでなく、つねもおしゃべりが好きだった。退屈しのぎに、歓迎する。三人の下宿人がいるが、その世話はほとんど珠江がやってくれた。つねは、珠江のさっぱりした気性が好きだ。可愛がっているといった方が適切だろう。世話してくれとつねがたのんだわけではなかったが、最初に珠江が親切気から手伝ったのだ。それがいつからか珠江の仕事になってしまった。珠江はてきぱきと片付ける。自分にはとても珠江のまねはできないと、つねは思っている。自分を根からのぶしょうものと思ったことはなかったが、珠江がしてくれるようになってから、根がぶしょうものにできていたのではないかと、疑った。ぶしょうに腰をすえてみると、居心地がよろしい。それは性格的なものだった。が、しんからのぶしょうものでは、三十二年も小千谷家の女中はつとまらなかったはずである。しかし、自分のことはよくわからなかった。小千谷家につとめていたころ、忠実な、よくはたらく女中であったと自分をふりかえることは、すこし気まりが悪いのだ。といって、ずるい女中であったとは思わなかった。生れつ

きのぶしょうものが、小千谷家で女中をしていたあいだは、うまくかくされていて、この家にうつり、珠江という調法な女とめぐりあったために、地金がそろそろあらわれはじめたのではないか。そう考えることは、つねの気にいった。それにしても、珠江はどういう気で、ひとの家のことをせっせとやってくれるのだろうか。毎朝の茶の間のおしゃべりのお礼ごころだろうか。一日の大半をつねの家ですごさせてもらうそのお礼だろうか。そんな計算を珠江がしているとは考えられなかった。珠江は根がひとのよい女だ。そのひとのよさの程度は、自分のぶしょうものとちょうどおなじ程度だろう。そして、自分は珠江のひとのよさを利用していると思う。が、べつに気がとがめることはなかった。一日の大半をうちにおいてやるという恩恵的な感情からか。お茶をふるまいながら、しゃべりたいだけしゃべらせてやるためか。しかも、卑猥な話には何の制限もつけないのである。卑猥な話をするときには、場所と相手をえらばなければならない。だれかれの見さかいなしにできることではなかった。卒直に話を面白がってくれる相手でなければ、困るのだ。うたがわしいような顔をされたり、軽蔑にみちた傍観的な表情をされては、話の腰を折られるだけでなく、生涯のひけめを感じることにもなりかねない。つねは、かれらにわが家を開放してやっているのだ。わが家の気らくさは、めいめいの家庭よりもきっと居心地がよいにきまっている。茶の間では、かれらは単純であった。かれらは賢くなろうとは思っていないふうである。茶の間で毎日くりかえされる雰囲気は、かれらが賢くなろうとするのをさまたげているようであったが、そのことにだれも気がついていないのだ。しかし、いくら話好きとはいえ、ときにはかれらを相手にしていることがいやになることもあろうかと思われる。が、つねにはそんなようすがなかった。つねはかれらに対して、いつも優越感をもっ

た。タイヤ修理、下駄屋、トラックの運転手と、かれらをささえている生活の手段にくらべると、つねは何もしなくてよかった。しかも、未亡人であった。つねは生活的には安定していた。かれらとは、その点がちがうのだ。そのちがいは、大きかった。そして、決定的であった。この家は、つねのものである。ほかにも五軒の家作をもっていた。それだけでも、十分たべていけるのである。三人も下宿人をおいているのは、自分ひとりでは家が大きすぎるからである。つねがつかっているのは、階下の二タ間である。下宿人がいなくとも、つねは二階を使うことがなかった。つねのこれまでの人生では、女中部屋だけで足りた。小さい一ト間で十分間にあっていて、それが習性となっているので、ほかの部屋の使用方法をよく知らないようであった。

「おつねさんはせっかく女に生れてきながら、その年齢で後家をとおすなんて、もったいないみたいね。くらしに何の苦労もいらないのだもの、入婿の話もときどきあるんじゃないの」

と、珠江がきくのだ。

「そんな男は、うっかり相手にできないよ」

「いろ気だって十分のこっているのに、もったいないみたいね」

「こわい目が光っているからね」

すると、珠江が首をすくめた。こわい目が自分の上にもそそがれているといわんばかりである。五十二の年齢まで厄介になっていた主家の小千谷家は、近くにあった。ときどき小千谷家の人間がようすを見にやってくるというのではなかったが、つねはいつも小千谷家を感じた。それは、気のゆるせないものだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com